日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

地区診断を用いた地域看護学演習の取り組みと今後の課題

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 和枝, 酒井, 康江, 蒲池, 千草, 乗越, 千枝, 小林, 裕美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000111

著作権は本学に帰属する。

地区診断を用いた地域看護学演習の取り組みと今後の課題

The Subject of the Education Program for Community Health Nursing Diagnosis Practice

松尾　和枝
Kazue Matsuo

酒井　康江　　蒲池　千草
Yasue Sakai　　Kamachi Chigusa

乗越　千枝　　小林　裕美
Chie Norikoshi　　Hiromi Kobayashi

日本赤十字九州国際看護大学
The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

要約

保健師に求められる役割機能は、時代の変遷やそれに伴う社会のニーズに伴って変わってきており、そのヘルスニーズを把握するための地域診断はきわめて重要なテクニックである。

しかし、近年の看護学生たちは十分な生活経験を持っていないために生活感覚に乏しく、地域住民の生活支援のための地域診断や保健師活動を理解することは容易でない。そこで、本学3年前期の「地域看護学（健康教育）」と「地域看護学（地域診断）」では、「地域」、「生活」の理解のために学生たちを実際にフィールドに出して、地域の諸問題のアセスメント、事業の企画実施、評価の一連のプロセスを経験させている。住民と直接、話したり、地域を歩いたり、その上で自分たちの五感を通して生活実態や生活感覚を理解させる。その地域診断結果を基に「健康教育」を実施する。それら一連のプロセスを通して保健師の役割を理解することを目標に授業を組み立てた。本研究では演習方法「地区診断を用いた地域看護学演習」のあり方を、教育的意義と効果の観点から分析し、より効果的な地域看護学教育のあり方を検討していきたい。

キーワード

保健師教育、保健師活動、地域診断、健康教育、健康増進、QOL向上、一次予防、ヘルスプロモーション

1．はじめに

保健師に求められる役割機能は、時代の変遷やそれに伴う社会のニーズの変化に伴って変わってきており、厚生労働省が平成15年度に示した「地域保健対策の推進に関する基本的な指針」では、生活者個人の視点の重視、住民の多様なニーズに対応した決め細やかなサービス、地域の特性をいかした保健と福祉のまちづくり、国民の健康づくりの推進等々、住民のニーズを十分に反映した活動でなければならないことを示しており、そのヘルスニーズを把握するための地域診断はきわめて重要な役割をなすものである。

しかし、昨今の学生たちは地域社会の中で生活者としての生活経験、生活感覚に乏しく、「地域」社会の一員として「地域」や「生活」を捉える視点を十分にもっていない状況にある。そのような保健師活動を理解する前提となる状況が理解できない状態で、その支援者たる保健師の役割を机上で学習することに限界を感じていた。また、看護大学教育においては、学生自身に保健師に対する職業や役割イメージが明確でなく、加えて現在の教育カリキュラムは保健師教育の時間数も少ないためその教育は容易でない。

そこで、本学では、3年前期の「地域看護学（健康教育）」と「地域看護学（地域診断）」では、「地域」、「生活」の理解のために地域でフィールドワークを行い、その地域診断を基に、「健康教育」を企画実践し、そのプロセスを通して保健師の役割を理解することを目標にしている。本研究ではその演習手法を分析し、より効果的な地域看護学教育のあり方を検討していきたい。

2、研究目的

「保健師の地域診断から健康教育の作成までのプロセスをフィールドで実践的に行い、その過程を通して保健師の役割機能を学習する」実践的な地域看護学の演習手法の課題を明らかにする。

3、方法

1）対象：3年次学生　121名

2）時期：前期　1教科30時間　計60時間

2004年4月～7月　　90分2駒授業／1回／週

3）本演習手法の特徴

(1) 担当グループ毎に健康レベル発達段階の異なる対象集団を定め、地区診断から健康教育までの一連のプロセスを体験的に学ばせた。

(2) 対象集団の生活の場を実際に見学するなどの地区踏査を実施したり、対象者にインタビューをするなど、地区診断の様々な方法の学習体験とその内容からニーズを把握する体験学習をさせた。

表1．演習スケジュールと指導目標

回数	日付	授業 講義／演習	授業 グループ学習	アウトカム（指導目標・学習目標）
1	‘4/14	オリエンテーション、地区診断（講義）	グループ決め	① 地区診断の目的・目標を理解し、その手法について学ぶ。 ② 健康教育の目的・目標を理解し、その手法について学ぶ。 ③ 演習の進め方について理解できる。 ④ 取り組みたい健康グループを選択し、そこで予測される健康問題について考え、グループで討議する。
2	‘4/21	地区診断（講義）、演習計画立案		
3	‘4/28	健康教育（講義）、演習計画立案	質問項目の検討	
4	‘5/12	地区踏査・地区診断･インタビュー他、グループ学習	地区踏査場所の選定	① 行動計画にそって、グループ学習（作業）が進行する。 ② 学外の関係者・関係機関とコンタクトをとりたい場合、早めに担当教員に報告し、事前に先方へ電話を入れるなどして都合を伺う。 ③ 地図、万歩計、ストップウォッチ、高齢者・妊産婦体験服、車椅子、メジャー、 カメラなど必要物品の選択を行なう。 ④ グループの進行具合を常に観察し、修正が必要な場合は、メンバー全員で是正をはかる。
5	‘5/19	地区踏査・地区診断･インタビュー他、グループ学習	フィールド調査	
6	‘5/26	地区踏査・地区診断･インタビュー他、グループ学習	フィールド調査	
7	‘6/2	地区診断のまとめ	グループ活動	① 情報整理→解釈・分析→健康問題抽出→介入計画立案　これら一連の流れを、所定の用紙にまとめ、提出する。 ② グループの進行具合を常に観察し、修正が必要な場合は、メンバー全員で是正をはかる。 ③ もし計画に変更や追加があった場合は、担当教員に連絡する
8	‘6/9	〃	グループ活動	
9	‘6/11	健康教育企画立案	グループ活動	① 地区診断の結果をもとに、健康教育のテーマを選出する。 ② 健康教育の目的・目標またその手法など、実施に向けた企画書づくりを行う。 ③ 記載にあたっては、適宜担当教員に指導を仰ぎ、アドバイスをもらう。 ④ 健康教育企画書に基づき、その準備（教材づくり・演技の練習）を行う。
10	‘6/16	健康教育準備	グループ活動	
11	‘6/23	学内発表会	参加者：対象地区住民・施設代表者、学内教員、宗像市保健師	① 地区診断のまとめの用紙を使い、地区診断から健康教育までの一連の学習活動を発表する。 ② 地区診断の結果から、どのような経過で健康教育のテーマに至ったかを発表できる。 ③ 健康教育の企画書に基づき、その内容を発表できる。 ④ 聞く側の学生は、発表をよく聞き、疑問・意見などあれば積極的に発言し、個別にコメントをグループに提出する。
12	‘6/30	〃		
13	‘7/7	〃		
14	‘7/14	健康教育（実際の対象者へ実施調整日）	フィールドでの健康教	① 各グループで対象の日程と調整して健康教育を実施。実施困難なグループは、大学で発表。 ② 学内発表会でのコメントを基に健康教育の企画

(3) 学内発表会を開催し、発達段階・健康や障害レベルの異なる対象集団ごとの地区診断結果と健康教育企画のポイントの概要について全学生で共有化を図った。その発表会は、住民や学内教員にも公開した。

(4) 対象集団に対し、実際に健康教育を企画、実施した。

4) スケジュールと毎回の指導目標（表1参照）

5) 演習の目標

① さまざまな立場・所属にある住民の、身体的・精神的・社会的な健康状態を説明できる。

② 地域社会の特性を踏まえ、住民の生活感覚の中での「快適・便利」や「不快・不便」が説明できる。

③ さまざまな発達段階・健康レベルにある住民が、どのような人々と関係を持ちながら、どのような施設やサービスを利用し生活しているかを説明できる。

④ 必要な地域の情報を収集するため、どのよう方法があるか説明できる。

⑤ 収集した情報を整理し、アセスメントすることができる。

⑥ 対象が「より健康で快適な生活」をおくるために、必要な要素や阻害因子について考えながら、健康問題を明らかにすることができる。

⑦ 住民のセルフケア能力や社会資源なども考慮し、対象にあった健康問題解決のための看護介入法を考えることができる。

⑧ 看護介入法の一つとして、健康教育を企画立案し、実施・評価することができる。

6) 指導体制

地域看護学教員5名が、15グループを発達段階で分類して担当し、演習協力各集団や組織との連絡調整や学生の相談窓口や個別指導を担当した。

7) 地域診断や健康教育の対象集団

表2．演習の対象集団・組織

Group	発達段階	地域集団・組織	Group	発達段階	地域集団・組織
1	母　子	M市保健センター・子育てサークル	10	成　人	R患者会
2		K保育園	11		F障害者施設
3		F育児支援グループ	12		K障害者施設
4	学童･青年	T小学校	13	老　年	J地区老人会
5		G中学校	14		A健康福祉部会
6		M高校	15		S老人保健施設
7		N大学	16		A老人病院
8	成　人	S中小企業	17		H介護家族会
9		JA青年部			

表2に示すように発達段階で大きく4つに分類し、健康や障害のレベルの異なる対象も含め計15団体に協力を依頼した。

8) 学生のグループ編成

グループ編成は、学生の希望を優先して行った。1グループは7～8名とした。

9) 倫理的手続き　2004年本学倫理審査委員会に研究審査申請を行った。学生に対しては、授業開始前に、本授業の目的と研究内容、授業終了後の調査への協力を依頼した。また研究協力の有無は成績に影響しないこと、学生個々の自由意志でよいことを説明した。

4、結果並びに考察

調査研究の協力者は、121名中80名（66.1％）の回答率であった。調査票を基に以下の項目について分析をし、今回の演習方法の課題を考察する。

1) 地区診断演習の方法と学び

地区診断では、表3に示すように、全てのグループが対象者や関係者へインタビューを中心に情報収集を行い、その他、地区踏査、日常生活習慣実態調査等々、グループ毎にそれぞれが対象の生活の実態を把握するための方法を考案し行った。地区踏査では、妊産婦や老年のグループが、妊婦体験服、高齢者体験服、アイマスクなどを着用したり、杖歩行、車椅子や乳母車を利用して、地域環境調査を行った。このような経験を通して、表4に示すような学びがあった。駅やスーパー、バス、病院等の公共スポットの位置や構造、生活に結びついた交通網・交通手段の必要性、坂道、段坂道、段差、溝蓋穴、不法駐車等、道路交通環境の安全性、「地域での生活（暮らし）」に影響する様々な地域診断の環境面の視点とそれを捉える必要性を学んだ。地域住民の案内による高齢化の進む新興住宅地での地区踏査では、地区の歴史や地域開発の発展の経過が人々の関係性に及ぼす影響などを学んでいた。また、骨密度計、万歩計、基礎代謝体脂肪体重計などの健康評価機器と日常生活習慣実態調査を行って、健康や生活の実態を客観的に把握し、この調査を通して住民の保健行動に対する知識や認識、態度を把握することができていた。これらの体験により、地域住民の健康生活を支援するためには、健康状態のみならず環境や社会資源、近隣の関係、人々の価値観、様々な要因を踏まえて地域診断する必要性を理解できていた。また、地域での保健活動においては、学生たちの問題認識と住民の抱える問題は必ずしもイコールではないこと、対象者の生活に基づいたニードで地域の問題と解決方法の考案を行うことの必要性を学んでいた。

表３．グループ別の地区診断内容と健康教育の場所とテーマ

Group	地区診断内容	健康教育場所、対象	健康教育テーマ
1	保健師・育児中の母親へのインタビュー、妊婦体験服着用・乳母車を押して地区踏査	大学ホール、子育てサークル、別途地区子ども祭りで実施	食生活見直し大作戦～野菜はみんなの味方だよ！～
2	園長、保育士へのインタビュー	大学ホール、子育てサークル	分娩の経過 ～こんにちは赤ちゃん～
3	大学教職員子育て経験者へのインタビュー	大学ホール、子育てサークル	ママの本音知ってますか？ ～ワーキングマザーの現状～
4	５年生２クラス生徒への調査、養護教諭インタビュー、給食残渣物調査	小学校、５年生２クラス単位で実施（60分授業）	健康に良い食事のとり方
5	２年生１クラスの保健体育教師と生徒への調査やインタビュー、保健所・警察署での薬物教育実態把握	G中学校、２年生３クラス単位で実施（保健体育授業）	シンナーの怖さ、あなたは知っていますか？ それでもあなたは薬物を使用しますか？
6	２年生への男女交際についての意識認識の実態調査、保健体育・養護教諭インタビュー	M高校講堂、２年生１クラス	性教育のピアエデュケーション
7	食生活運動習慣実態調査、骨密度測定、万歩計による運動量調査	大学ホール、看護大学生	あなたの骨は大丈夫？
8	喫煙状況実態調査、社長・社員インタビュー	中小企業、社員 19：30～	喫煙について考えよう
9	JA加盟者への健康管理状況調査、農村地域環境の地区踏査、健康度評価教育	地区コミュニティセンター、農協加入者（台風にて中止）	あなたの健康を数値から見直してみませんか？！ ～地区の健康診断に足を運ぶ、きっかけに～
10	患者会会長へのインタビュー、コミュニティ組織への啓蒙啓発教育活動	地区コミュニティセンター、コミュニティ代表者	高齢者と地域との関わり～自分の将来をみんなと考えよう～
11	施設利用者へのインタビュー、利用者の生活の場や生活圏域の地区踏査	障害者授産施設、通所者	きっと役立つ食事のおはなし
12	施設の活動に参加、利用者の生活の場や生活圏域の地区踏査、指導者へのインタビュー	授産施設・共同作業所、通所者	本当はコワイ！肥満の医学
13	地区住民と共に地区踏査、バリアフリー住宅の訪問、住民インタビュー、万歩計装着による運動量調査、生活習慣実態調査、骨密度測定	地区公民館、老人会	いきいきほねらいふ ～楽しさと健康維持を目指して～
14	老人服の着用、車椅子を利用した地区踏査、インタビュー、市役所介護保険課・地区保健師・地区健康福祉部会（食進会・ヘルス委員・民生児童委員）・宗像市警察署へのインタビュー	地区コミュニティセンター、健康福祉部会代表者	コミュニティ強化－地域住民が自ら問題に取り組んでいくためには－
15	センター利用者への生活習慣実態調査、万歩計の装着による運動量測定、骨密度測定、利用者に対する健康問題認識のインタビュー	S老人福祉センター、センター利用者	骨！！～今日からできる骨対策～
16	高齢者体験服を着用したデイケア利用者のデイケア施設内や生活圏域の地区踏査、デイケア利用者へのインタビュー	病院デイケア室、デイケア利用者	自宅で気軽に簡単体操
17	介護家族会会長・会員へのインタビュー	保健センター、介護家族の会	地域と介護問題～ひまわりのような明るい介護を目指して～

2) 健康教育演習の方法と学び

健康教育では、15グループ中、日程調整が不能であったグループを除く12グループは、実際に地域住民を対象に健康教育を行った。その教育内容は、地区診断結果に基づくもので、対象の問題状況やニードを踏まえた内容となった。初めての経験ではあったが、実施した全グループで対象者からの高い評価を得ることができた。学生の学びの主なものを表4に示す。

表4、演習を通しての気づきや学び

保健師役割機能	住民のニーズにあった健康づくり／幅広い知識と技術／地域住民との情報交換 行政と住民の橋渡し／住民とともに考え解決していく（同じ目線）／地域の問題を援助者側の位置から捉えるのではなく住民の位置からみる必要性 多機関・多職種との連携・コーディネーター／予防的かかわり 集団－家族－個人それぞれの問題点を把握／あらゆる年代や立場の人を対象 住民が自らヘルスアップしていけるような支援／地域密着型の活動 住民の最も身近で信頼される存在、良き相談役／地区診断の担い手
地域診断	地域資源（人・組織・各種サービス）の存在に気づく／実際に現場に出向く事の重要性 それぞれの健康レベル、発達段階によって健康問題や看護介入法が異なる事 コミュニティの歴史・地域開発の経過は把握する必要性 アンケート・インタビューの効果的方法／データー上（机上）では知りえない現場の現実 地域に出向くことの必要性／生活リズムや保健行動の実態を把握する必要性
健康教育	集団かつ個別性も考慮したものにする／対象者の状況やニーズに合ったものにする 健康問題は漠然とした問題より住民に身近な問題からかかわること 曖昧な知識では伝わらない／幅広い知識の必要性／一方的に知識を与えることが教育でない 対象の年齢や健康問題によっても効果をもたらす教育手法が異なること 住民へのフィードバックは相互学習の好機／学内発表会での学びの共有／その効果的方法
グループ学習	グループ間においても、住民との関係においても連携・調整の重要性を学んだ グループ活動は、皆の意見交換により人数以上の力が出ると感じた 考え方が違う人たちと1つのものを作り上げることの難しさ 大変ためになるグループワークであった チームワークの大切さ、協力の力を学んだ。グループがいろいろな問題について考えることでここまでできると感じた。
演習全般への意見提案	自分で選んだ対象に教育をするのは責任感ももてるし、とてもよかった。いろんなことがわかった。人との交流の場が良い学びになった。 本当に大変だったけど得ることがとても大きかった。 精一杯やったのでとても勉強になった。ずっとこの授業を続けてほしい。 達成感があり、満足することができました。学びを深めることができました。 良い学びの機会になりました。 たくさんのことを学びとても充実感があった。時間外の課題がたくさんあったがそれだけかける意義があった。とても重要な演習であると思うので時間を増やしてほしい。

3) 演習方法に対する学生の評価

演習目標項目ごとの達成状況は、図1に示すように、いずれの項目でも60%以上の学生が「非常に良くできた」「よくできた」と高い評価をしていた。特に5のアセスメント、8の健康教育企画実施評価については、30%近くの学生が「非常に良くできた」と評価しており、全体的に評価が高くなっていた。

図1　演習目標の達成度

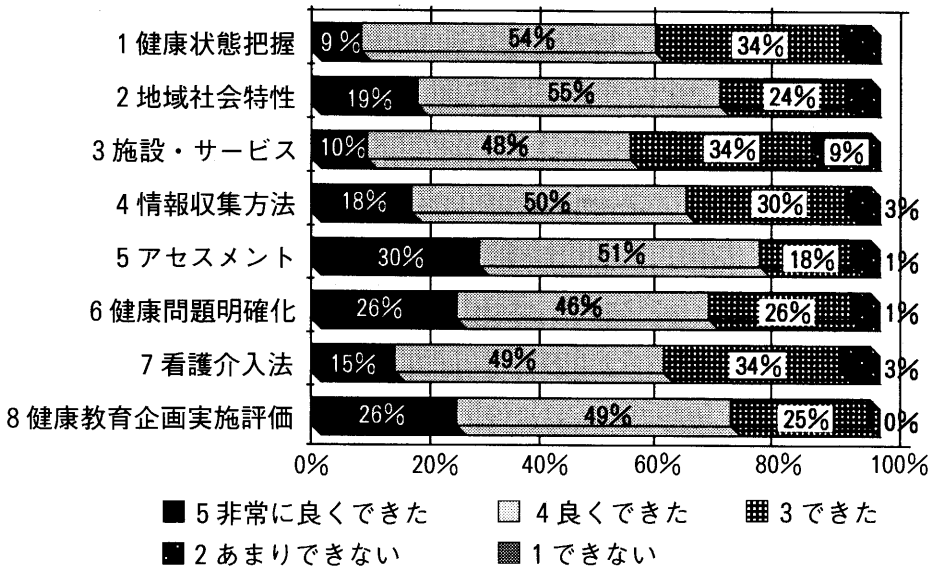
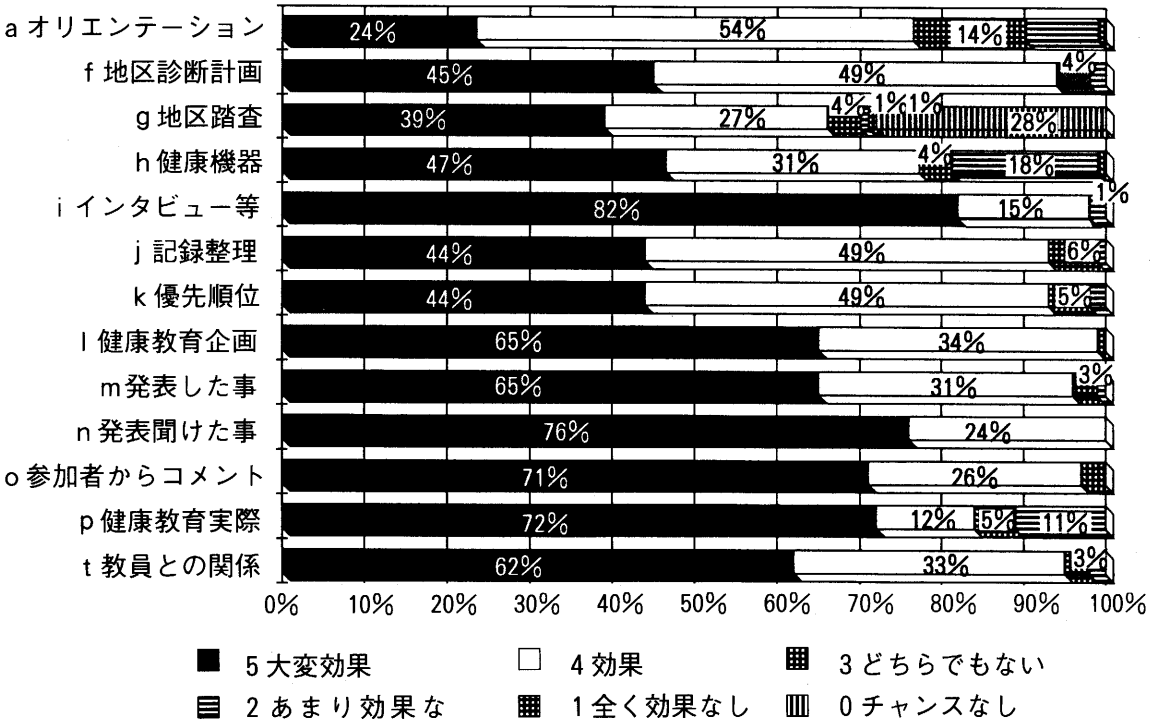


図2　学　習　効　果



学習効果を高めた要因については、図2に示すように、オリエンテーションと「チャンスなし」の理由によるg地区踏査、h健康機器の評価が低かった他は、すべての項目で80％以上の学生が今回の演習手法について「大変効果的」「効果あり」と評価していた。特に、i住民へのインタビュー、n他のグループの発表が聞けたこと、o参加者からのコメント、p健康教育の実際、l健康教育の企画、m発表したこと、t教員との関係では、50％以上の学生が「大変効果があった」と高い評価をしていた。

時間内のワークでは、目標を達成することができず、多くのグループが時間外にも調整して主体的な学習活動を行った。その結果、学内授業計画はほぼスケジュール通り進行した。

4） 演習の課題

今回の演習方法について、表5に示すような課題もあった。3年の前期は、他の教科でもグループ学習が集中し、学生たちは、グループ学習の日程調整も容易でなかった。加えて今回の演習ではワークに費やす時間が長く、その負担感はとても大きかったようである。しかし、学生たちは主体的に目標をもって計画的に学習活動をおこなった。その結果、表4の演習全般への意見提案にも記載されているように、多くの学生から有意義な学びの多い学習であったとの評価も得ている。教員の指導方針については、対象との連絡調整や、問題状況によって臨機応変に対応していく必要性が多々あったが、教員も学外実習等で不在にすることも多く、学生たちのニーズにいつでも対応できるような状況でなく、また連絡調整も15グループの調整に加え、教員同士の連絡調整と、対応が十分でないこともあった。オリエンテーションも、今回は初めての試みも多かったため予測できないことも多く、十分な内容でなかった。今後は、すべての連絡調整を教員サイドで行うのでなく、細かいところは担当グループに実施させるなどの調整業務も学生にさせることも学習の一部ではないかと考えられる。学生からは、演習前に、住民に対しての言葉遣いやインタビューの際の配慮など、対人関係の基本的なテクニックを事前に学習する必要があるという意見もあった。

健康問題の優先性の判断や、地区診断対象と教育対象が異なったこと等の問題認識は、この地域診断の学習において重要な気づきでもあるので、今後は、演習のグループワークの中で学生の疑問に時間をかけて対応する必要がある。グループ活動に関する問題点については、グループ内の連絡調整や関係調整が大変だったようであるが、この経験は、看護職のように連携協働作業の多い職種においては、大変重要な学習課題である。表4の演習の学生たちの気づきや学びにも記載されているが、大学教育の中で、このようなグループ学習の経験は初めての経験であったらしく、貴重な学習体験になったと思われる。学生の記載にもあるが、自分で選んだ対象に対する責任感、これが学習動機にもたらす効果の大きさを痛感した。

表5、演習中　困ったこと

指導体制	教員の指導体制が統一されていなかった 授業時間の不足（時間外が多かった） 説明不足により演習方法の不理解
演習活動	対象者とのコミュニケーション（言葉づかいや配慮） 様々な地域の問題の中から優先課題を決める方法 地区診断の対象と健康教育の対象が異なったこと
グループ活動	特定のメンバーだけが頑張った（参加しないメンバーの存在） メンバーとの人間関係がうまくいかない リーダーから伝達事項が充分伝わらない 特定の人に負担が集中してしまう

5、結論

今回の演習の特徴に対する効果や課題を分析すると、

① 担当グループ毎に健康レベル発達段階の異なる対象集団を定め、地区診断から健康教育までの一連のプロセスを体験的に学ばせた。学生は、地区診断から健康教育までのかかわりを持つことで、対象集団に対する責任感を感じ、大変熱心に学習活動を行った。また、様々な発達段階の学習プロセスを共有することで、年齢や健康レベル、健康問題によって活動の展開方法が異なり、対象に合わせて創意工夫する必要性を学んだ。

② 対象集団の生活の場を実際に見学するなどの地区踏査を実施したり、対象者にインタビューをするなど、地区診断の様々な方法の学習体験とその内容からニーズを把握する体験学習をさせた。対象の生活の場の地区踏査を通じて、あるいは対象の健康実態、保健行動、価値観、文化などの情報を数量的に、生の声から、あらゆる感性で地域の保健問題を感じるとる必要性と、対象の目線で理解することの必要性を学んでいた。地域に出ること、対象の声を聞かないと数字だけでは地域の問題が見えないことなどの気づきがあった。

③ 学内発表会を開催し、発達段階・健康や障害レベルの異なる対象集団ごとの地区診断結果と健康教育企画のポイントの概要について全学生で共有化を図った。その発表会は、住民や学内教員、行政職員にも公開した。発表会では、時間が不足するほど積極的で活発なディスカッションがあった。自分達のグループワークの経験を通して、発達段階や健康レベルの異なる他のグループの活動を理解しようとする積極的な姿勢が見られた。その質問内容の深さから、問題分析能力が高まっていることが理解できた。また、それぞれのグループ学習の内容が深い分だけ、他のグループの発表に対し

ても熱心な聴講姿勢が見られた。発表会には、住民や他領域の教員などの参加もあったが、学生達は、そのコメントによりさらに住民の視点、理論的な課題など、種々の学びをしていた。またこのような活動を通して、大学教職員間、住民、行政と大学などの相互理解もより深まると考えられる。昨今は、本学の地域看護学演習が住民のコミュニティ活動の1プログラムとして組み込まれるようになり、それと同時に住民の保健師活動や保健師教育への要望や提言も年々明確なものへと変わってきており、保健師活動が地域の中に理解されてきたと実感している。

④ 対象集団に対し、実際に健康教育を企画、実施した。

学生にとっても教員にとっても、時間的、身体的・精神的な負担感は大変大きかったが、企画実施まで担ったことは、学生の学習意欲を著しく高めることになった。

今回の演習方法は、保健師の地域診断やその地域実態や住民ニーズを踏まえた健康教育の企画の必要性についての学生の理解は大変高いものになった。また、学生たちは、多くのインタビュー経験から、健康増進のための課題をアセスメントするための情報収集の難しさを実感したと感じる。また、それをどのように行動変容に導くか、様々な経験や他グループの活動を通して効果的な健康教育の企画のあり方について多くの学習をした。多くのグループワークの負担も大きかったが、自分たちの対象に健康教育を実施したいという責任感や役割意識が、よりグループの凝集性を高め、主体的で学習成果の多い活動につながったと考える。全体を通して、学習効果がとても高いものではあったが、時間的には学生の負担を大きくしてしまった。今後は、大学のカリキュラムの改正の中で、時間増を交渉していく予定である。

文部科学省高等教育課は、大学改革の方向性として、大学が知的文化拠点として、地域の専門人材育成や生涯学習推進の役割を担い、産学官民の連携を深めることや、その過程の中で大学の地域への貢献をより強化するように指導している。本演習については、地域住民の参加や協力は、毎年、積極的なものになってきており、また、住民から大学への地域看護教育への提案もなされるようになってきた。その提案内容に、保健師に対する健康サポーターとしての役割期待が強いことが理解できる。地域住民の地域活動のプログラムにこの演習が組み込まれるまでになってきた。また、住民の大学教育へのかかわりは、住民の健康増進や生きがいにも寄与しているとの評価も聞かれるようになってきた。さらに行政との関係も「健康増進」というテーマに関連して、接点が多くなってきている。今後も住民とともに互いの英知を出し合いながら、「地域キャンパス」で効果的な地域看護教育のあり方を検討していきたいと思う。

6、おわりに

本研究・本演習を実施するにあたり、ご協力いただいた宗像市健康づくり課の関係者の

方々、並びに宗像市の健康福祉部会の方々、施設、学校、各グループや患者会・家族会の関係者の方々に感謝申し上げます。

【参考文献】

1) 菅原京子他；地域看護診断を主要な目標とする実習の教育方法の検討、山形保健医療研究第6号、P69¯83、2003年
2) 尾崎米厚；地域診断は実践のプロセスの中にある、保健婦雑誌57、P618¯621、2001年
3) 北村真弓他；地域看護学「健康教育」実習での学生の学び、日本地域看護学会第5回学術講演集、P163、2002年
4) 佐伯和子他；地域の看護アセスメントについての保健婦の認識地域看護学、日本公衆衛生雑誌47、P418、2000年
5) 清水由美子他；大学化が進む地域看護教育方法の現状―「訪問指導技術」「地区診断」に商店をあてて―、日本公衆衛生雑誌48、P463、2001年
6) 大須賀智恵子他；踏査を導入した地区診断の学習成果と課題、保健婦雑誌58、P506 511、2002年
7) 大野絢子；「地区診断の基礎教育」の現状と課題―時代の流れをおって―、保健婦雑誌57、P610¯616、2001年
8) 中村雄二郎；臨床の知とは何か、岩波新書、1992
9) 松尾和枝；地域とともにある看護、第6回日本赤十字看護学会学術集会講演集、2005年